

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

有袋類は胎生であって胎盤がない。そのために胎児は不完全な発育状態で生まれてしまう。カンガルウは受胎してから約四十日後には生まれるが、そのままでは育たないので、育児嚢のうという袋があつて、生まれた子供は多分自力でその袋の中にもぐり込んで発育を続ける。

これは動物学の復習である。どうして同じ哺乳類でありながら胎盤のない種類がいるのか。これは動物学では考えないことにしている問題である。それは専門を決めた学者にとっては、用心しなければならぬおとしあな奔である。それに動物学の中でもこれに似た奇妙な例はいくらでも挙げられる。そして人間だけには、理解しにくいような奇妙な器官がないなどと思つてはならない。

鳥類は卵を産み、それを放っておけば孵化ふかしない。それを抱きあたためるために、鳥には抱卵斑ほうらんはんというものがある。そこには綿毛や脂肪がなくて血管が集まり、卵をあたためるのに都合がいいように皮膚の温度が高くなっている。

その他、自分の子供を育てるために、また敵から子供を守るために、どれほどの配慮が行われているか、それらの書かれている動物の本は興味を持たれ、感動を与える。

親は自分の少年少女時代の感動を蘇よみがえらせて、ある機会にそれらの話を子供に聞かせ、動物の生活を書いた本を読ませる。人間はこうして教育の材料を見付け出すのが巧みである。それに効果も期待できる。

しかしお膳立アてのでき過ぎた与え方は効果が薄れ、時には逆の効果の現われる虞おそれもある。

それよりも、子供はある機会に、動物の生活の一部分に出会うことが必ずあると信じよう。その時には余計な口出しをしてはならない。たとい、いきなり残酷に見える行動に出ても、それも黙って見ている忍耐を養っておかなければならない。自分が産み、自分が育てている子供のことは、自分以上に知っている者はいないという自信は必要だが、自信は思いつきで変貌しやすい。

親の眼に残酷に映る子供の行動には必ず何か別の意味が含まれている。残酷な行為だと親に教えられるよりも、自分からそれを感じ得る方がどれほど値打ちがあるかをまず考えることである。それが親にとっては一番難しいところかもしれない。

動物と子供との間には、特殊な対話がある。だが、それを題材にして大人が創った物語にはかなり用心しなければならぬ。それらの大部分は人間性の匂い豊かな舞台上で演じられた芝居のように

書かれているからだ。シートンの『動物記』を子供に与えていいものかと躊躇ちゆうちよしている親は、この本をかなりよく読み、大事なところを読み落とししていない。

(引用先 2018 東京大学―前期 串田孫一『緑の色鉛筆』)

問

「お膳立てのでき過ぎた与え方は効果が薄れ、時には逆の効果の現われる虞れもある」(傍線部ア)とあるが、それはなぜか、説明せよ。